

## 《シリーズ ケアをひらく》

## ケアってなんだろう



編集：小澤 勲

A5 頁 304 2006 年  
定価 2,100 円(本体 2,000 円+税 5%)  
[ISBN 978-4-260-00266-0]医学書院刊

落語でよく「スガレている」という表現が出てくる。「よっ、いいねえ。スガレてて」などと使う。粋でナチュラルで様子がよいサマのことを言う。どうやら「素枯れている」と書くらしい。この本の第Ⅲ部では、小澤氏の公開講座での講演録が記載されている。小澤氏の視点を理解するのによいテキストである。良寛さんの歌を引用しながら老いを語るあたりがとてもいい雰囲気だ。素枯れている。

本書は、四部構成になっている。第Ⅰ部では小澤勲氏が田口ランディ氏、向谷地生良氏、滝川一廣氏、瀬戸内寂聴氏という多彩な4氏と対談。第Ⅱ部は若手研究者3氏との対談で、彼らの小澤論も添付されている。

「ケアプランはあまり意味がない」「統合失調症の人には、健常者になることへ恐怖がある」「認知症の人はきわめてわかりやすい人」「痴呆予防論はうさんくさい」などなど、一般的なケア理論の枠組みを揺さぶる言葉が飛び交う。

この本を読んで、『言葉がもつ力』をあらためて実感した。自分の概念を揺さぶられる言葉に出会うと、(現実には何ひとつ問題は解決していないのに)なんだか楽になるのである。

小澤氏は、何度か「周辺症状は、まあなんとかなる」と語っている。おいおい、ほんとにかよ、という感じである。なにしろ認知症高齢者介護の現場では、まさにその「周辺症状」\*2の対応に追い回されているのである。

しかし、小澤ケア論の視点は問題行動ではなく、『問題行動を生み出すメカニズム』にある。常に、なぜその行動が生じるのか、という仕組みを読み解こうとする。

本書で語られている小澤氏のメカニズム解析が本当に正解なのかどうかかわからないけど、「周辺症状って……、なんとかなるかも……」という気になってくる。オルタナティブな(別方向の)アプ

ローチが提示されるからである。新たなストーリーが切り開かれるということは、漠然と形成してしまっている図式を解体することでもある。それが介護の現場で、どれほど重要なことであるかは言を待たない。

対談では、すごくラディカルな視点が次々と提示されるのに、なぜか奇をてらった感じがしない。違和感がない。なぜだろうと考えてみて、ここに登場している人たちがみんな「かけがえのなさ」というところから軸がブレていないからじゃないかと思いついた。

たとえば、『認知症高齢者という無名の存在へとひとくくりにされてしまうこと』に抵抗し、『その人その人の物語』に寄り添おうとする姿勢を随所に確認することができる。寄り添いながら、それでいてプラグマティックだ。そこがしびれる。素敵だ。本物の言葉はやっぱりかっこいい。

その人に寄り添うということは、その人の物語にシンクロすることである。小澤氏は、「島から来た人が入所したら、ぼくはその島を知らなかったの。船でその島に行ってきました。ああ、こういう島なんやなと。あるいは、金光教の信者が入ってきたから、どんなやろうと三原から近かったの。金光教の本部まで行ってきたりして」(頁157)と語っている。

これである。症状や行動に眼を奪われることなく、その裏に広がる物語を読み解こうとする態度だ。自分の来歴を知っている人がどんどん少なくなっていくことの寂しさや苦しさをよく知っている者の発想だ。

私たちはみんな、何らかの物語の中に生きている。でもその物語に耳を傾けようとする者がいなければ、生を持続することは困難だ。逆にいえば、耳を傾けてもらえる者がいれば、そこは生きていける場なのである。ケアとは生きることと正しく向き合うスキルなのかもしれない。

\*1：評者の釈徹宗氏は、グループホーム「むつみ庵」代表として認知症高齢者のケアにも当たっている。また昨年発行された内田樹氏との共著『インターネット持仏堂 <1> <2>』(本願寺出版社)が話題を呼んだ。

\*2：認知症の症状は、「記憶障害」「見当識障害」「判断力の低下」などの中心となる症状(中核症状)と、「妄想」「異食」「徘徊」などの中核症状に伴って起こる問題行動(周辺症状)に大別される。